



浅野忠利

●楽劇「ニュールンベルグの名歌手」

ワーグナーの歌劇「ニュールンベルグのマイスタージンガー」は靴削りのマイスター（親方）が主役である。金細工師が登場し、その娘がプリマを演じる。描かれている時は折しも、宗教革命後の大きな変貌期である。中世以来の都市の歴史を背負い、変わりゆく未来を予感させる。手工業ギルドが中心に座り、その時代の都市の価値観を生み出している様をまざまざと見せつける。当時のニュールンベルグは人口4～5万人の都市であったと思われるが、ここに270を超える職種に亘り、5千人程度のマイスター（親方）が都市を支えていた。

●門閥都市からツフフト（ギルドと同義語）市制へ

中世都市の基盤に物々交換から貨幣へ、身分から契約へという転換が大きく寄与している。ここで齎された都市生活の開放性は経済活動の効率化に大いに役立った。『都市の空気は自由にする』といわれる中、多くの人々が農村、荘園から都市に向かったのであるマックス・ウェーバーによれば、都市が都市たりうるには、少なくともある程度強靱な商業と工業の定着に加え防禦施設・市場・独自の裁判所・自前の法そして公僕を備えている必要があるとしている。自治都市の初期には多くの場合、いわゆる名士がその実権を握っていた。市民集会に参加し、課題解決の議論に加わるには、経済的なそして時間的なゆとりを必要とした。すなわち、政治によって生活する必要なく、政治のために生活するという余裕が都市政治に主導的に関わる条件であった。この条件に適う名士は門閥と呼ばれ「門閥都市」を支配した。14世紀になると、門閥により都市政治への関与から排除されていた商人や手工業の親方層が政治参加を求める運動を繰り返していった。

この市民闘争・ツフフト闘争を経て多くの都市がツフフト市制へと移行していった。その代表的な都市はシュパイヤ（1327）、シュトラスブルグ（1334）、バーゼル（1336）、ウルム（1345）、ケルン（1396）等である。ツフフト市制のもとでは、手工業ギルドの親方を中心に都市政治、都市行政が行われた。多くの都市において12世紀以降、都市共同体の行政機関として機能したのが参事会である。参事会は都市毎に千差万別であったが、総じて述べるなら①門閥②商人③手工業ギルドの3者の力関係から構成が決まっていた。参事会の実像を二つの例で観る。ケルンでは15名編成で任期1年、退任後2年間の選出禁止、後任指名制である。後任の指名は14ある門閥が自らの門閥から指名する事を原則とした。14世紀末からは新たに手工業ギルドを含む同業組合を中心に22の参事会選出母体が編成され、参事会の衣替えが果たされた。ニュールンベルグでは1500年頃までに35の門閥があり、つねに参事会に席を占める事が出来たのは15門閥とされた。しかし、ツフフト市制への本格的移行のなかったこの都市においてさえも、確実にその中心は、門閥の手から手工業者へ移行している。1370年には参事会全体の約5分の

1にあたる8人の手工業者の代表が受け入れられ、1516年時点の参事会員リストには立法官13、参審人13、古老8に加えて8人の手工業名を連ねている。

●宗教改革と30年戦争

宗教改革の手工業ギルドに与える影響は大きかった。宗教改革に呼応した都市の殆どはツフフト市制を敷いた。そこでは、厳しい契約社会が形成され、プロテスタンティズムの倫理を背景とする勤勉禁欲が勤労の基本精神となった。

宗教改革後、訪れた最初の試練は農民戦争での農民の敗北である。残されたものは10万人の犠牲者と領邦諸候による抑圧の強化であった。この結果は農民を再び土地に縛る事となった。1618年に始まった30年戦争は新旧キリスト教による宗教戦争として始められたが、終盤はハプスブルグ家に絡まる国際戦争の様相となり、この闘いによってドイツは人口の三分の一を失い、甚大な損害を蒙ったのである。この結果都市は手工業を中心とする生産体制に壊滅的な打撃を被ると同時に領邦君主からの執拗な攻撃に曝されることとなった。多くの都市は戦わずして軍門に下った。自治を手放すこととなった都市も少なくなかった。ここで手工業ギルドを抑えて、都市の有力な担い手として現れたのが商業資本であった。この商業資本のもとでもはかばかしい回復を見せない手工業ギルドに替わり、必要な産業改革を引き受けたのは絶対主義国家であった。30年戦争の6年後の1654年、神聖ローマ帝国議会の支持のもと領邦君主の政府は手工業ギルドに制約を加える一方、工場制手工業の創出と助成に乗り出した。1730年代プロイセンは産業立法などにより手工業ギルドを改革し、その諸権限を国家のものとする一方フランスからユグノー（改革派）教徒を大量に受け入れ産業の基礎を固めた。

●手工業ギルドの強かさ

工場制手工業が生産活動の主流に移行する中、手工業ギルドはマイスターと職人の激しい闘争を繰り返しながら、ペストの大流行、宗教改革、農民戦争、30年戦争と打ち続く厳しい環境の変化に対応して行くのである。その過程の中でマイスターは商業資本と一体になり、職人は教会勢力と手を結ぶなど様々な場面で、様々な相手と、様々な戦術マイスターと職人は、ある時は袂を分かち、ある時は手を結びながら、手工業ギルドとしての存在を主張し続けるのである。19世紀に入り、手業ギルドは社会の生産体制の中心にあったことに変わりなかった。手工業から工業への移行の真只中にあたって、必然的に生ずると想われる手工業ギルドの衰退や崩壊を部分的なものに留め、手工業ギルドが生産活動の中心に座り続けたのも、手工業ギルドに内在する共同体への奉仕を旨とする倫理観にあったに違いない。

次回は本格化する工業化の中、手工業ギルドが19世紀という激動期を乗り越え、社会民主党（spd）を設立し、ワイマール共和国の樹立に向かった姿を追う。以上